

第59回全国寄宿舎教職員研究集会

集会報告 障害児学校部長 柳田陽一

第59回全国寄宿舎教職員研究集会は数年ぶりの地方開催となり、盛岡市で8月5・6日、マリオスを会場に全国から約90人（高教組40人）の参加で行われました。連日の猛暑とは一転、雨の2日間でした。

今回は岩手からの「3・11東日本大震災」の特別報告や、寄宿舎指導に関するビデオインタビューで全国の仲間の熱い思いを聞く機会もありましたが、2日間をとおして、強く印象に残ったものをお伝えしたいと思います。

まずは1日目の開会式での、日教組の瀧本司書記次長のあいさつは、「ここ10年で寄宿舎を減らしたのは14都道府県で、増やしたのは4県のみ。入舎基準を『通学困難』に限定し、入舎数を減らした東京の例もある。だが、寄宿舎の役割を障害や病気がある子どもを支え、家族を支援する教育機関と位置づけ、むしろ整備や拡充が必要なのではないか。また、寄宿舎の子どもたちが減っていることから、実習教員への任用替えが行われている県もある。」というものでした。

2日目の分散会では、入舎希望者の減少による寄宿舎閉舎にまつわるとりくみなど、全国の実践について討論しました。

新学習指導要領で求められている「資質と能力」の向上、特別支援教育からインクルーシブ教育への転換、進む少子化と学校の統廃合など、教育をめぐる状況が変化を続ける中、寄宿舎が担う教育の役割については、今後も実践を伴った研究が必要と思われる。今回、全国の仲間が岩手に集まり、岩手の寄宿舎指導員も多数参加し、意見交流できたことは意義が大きく、今集会の成果を、子どもたちとの日々の寄宿舎生活に生かし、来年の全国集会へつなげたいものです。



全体会の様子

岩手高教組 原水禁ナガサキ平和の旅

8月6～9日の日程で開催した高教組原水禁ナガサキ平和の旅に9人が参加しました。6日の夕方に宿舎に集合し、翌7日の午前中はフィールドワークで長崎市内を電車を使って巡りました。被爆した城山小学校や山里小学校の校庭は、焼け付くような日差しの中で白っぽく見えるほどで原爆が投下された日の暑さにも思いを馳せました。防空壕や爆風で半分吹き飛ばされた鳥居など、

今も市内各所に残る原爆遺構を見ると、これが現実起きたことなのだという

ことを信じざるをえません。あまりに現実離れた惨状を前に、思考が止まってしまいます。午後からは、原水禁世界大会・長崎大会の開会式に出席しました。2日目から3日目にかけては、高校生1万人署名実行委員会の全国交流会に参加し、高校生の活動の様子を見ました。早朝若者集会に参加するなどしてがんばっている高校生の姿を頼もしく思いました。

(本部 村上智加子)



浦上天主堂前の高教組参加者



高校生の早朝集会